

巻頭言：遺跡の発掘調査をとおしての人と自然の交渉史研究

遺跡の発掘調査がもたらす人間の生活様式や自然環境に関する情報はあまりに多い。一点のボーリング・コアから抽出する情報に比べれば格段の違いがある。その違いを大きくしているもっとも大きな理由は、遺跡の発掘調査がふつうは面的になされ、複数の異なる地形単位を連続的にはぎ取って行く場合が多いことであろう。だから、莫大な情報を埋蔵する遺跡の発掘調査には、人と自然の交渉を解明しようとする立場からも自然環境を復元しようとする立場からも多くのメスが入れられてしかるべきであるが、現状はどうであろうか。

遺跡の発掘調査をとおして、人とそれをとりまく環境を復元しようとする場合や人と自然の交渉を捉えようとする場合にはいくとおりもの遺跡の捉え方がある。これまでもっともふつうだったのが、遺跡をミクロに捉えるというものである。要するに考古学的な遺構や遺物を探索するような捉え方と幾分似たところがあり、人間と直接かかわりのあるらしい、いわば人間臭いものによって遺跡への執着が許されるようなケースである。しばしば新聞やテレビのネタを探すような情緒もないわけでない。周辺域のものとの比較を計ってはいても、ある一つの遺跡においてはボーリング・コアと同様にある一点での機械的な分析で終結する場合もこの捉え方の範囲にあるのかも知れない。これとは反対のマクロな捉え方も珍しいというものではない。遺跡がどのような地理的位置にあるのかといった立地論とも似た捉え方で、成帯論としての植生帯における位置づけといったものがこの部類に入るであろう。ところが、このようなミクロな捉え方とマクロな捉え方の間にある、いわば中間的な捉え方がなかなか見られない。人間の居住地とそうではないところ、人間が相互にかかわりをもつ複雑な土壌的・地形的環境、いわば点から明らかに連続して形作る肉眼的な面に目を据えた捉え方が意外に見当たらないのである。理屈では大きな地形の中での遺跡の位置づけも点の集合である面としての捉え方ではあるが、それはあくまで巨視的な捉え方である。

人と自然の交渉や自然環境というときの自然や環境とはどのようなものか、この認識が遺跡の捉え方に大きく関係しているらしい。そもそも考古学においては「遺跡とそれをとりまく環境」が漠然とした環境であることがしばしばである。遺跡の発掘調査をとおしての自然環境の復元にあたって、こうした考え方が大きく影を落としてしている。この場合の遺跡とは、どうしても遺構・遺物があるところしか受け取れない。行政的な発掘が多いからとりあえず遺跡をそういうふうにつまみ取っておかねばならぬのは仕方がないとしても、考古学が環境を、あるいは自然との交渉を積極的に考える立場に立とうとするのなら、人と環境の捉え方をもう少し具体化しておかなければならない。人と自然の交渉を考えようとするわたしたちにとっては、遺構や遺物は人そのものではないのである。遺物としての石器を作るには、人と相互作用を及ぼしあう多様な環境構成要素が関係する。人にはもちろんのことであるが、その環境構成要素が何であるのかということや相互に影響を及ぼし合う作用にこそ興味が集中する。

遺跡の発掘調査におけるいわば中間的な捉え方というのは、発掘調査区域における空間的構造の捉え方にほかならない。人がどこにどのようにして居住したのか、どこでどのような生業を展開したのか、そうした人の作用がどのような環境構成要素とかかわり、どのような作用を受けたのかといった人と環境の相互作用様式を解くには、人や植物群・植生、動物、土壌といったものの空間的構造を理解する必要があるように思われる。一方的に人が植物群・植生に干渉しているわけではないし、また植物群・植生が一方的に人の生活に影響しつつづけているわけでもない。人も環境も互いに相加的かつ漸進的に変化しつつづけるのが自然ではないだろうか。そのような捉え方が許されるとすれば、当然のことではあるが、発掘調査区域とそれ意外の区域とは連続一体のものとの捉え方につながってくるであろう。

人と植生の交渉史の研究においては、とかく人間臭さに執着しがちである。たとえば都市化が進んでいく中での人と自然の交渉史を見据える時、都市のみに、あるいはそのほんの一部の街角に執着してはどうかということになるであろうか。それでほんとうに都市化に揺れ動く人と環境の相互作用様式がわかるだろうか。まだまだ人と自然を理解しようとするには、考えなければならないことが多いように思われる。考古学や民族学といった人間臭さに飽き足らない分野から植生史研究への提言がもっと出されてもよいように思うのだが、どのようなものだろうか。